

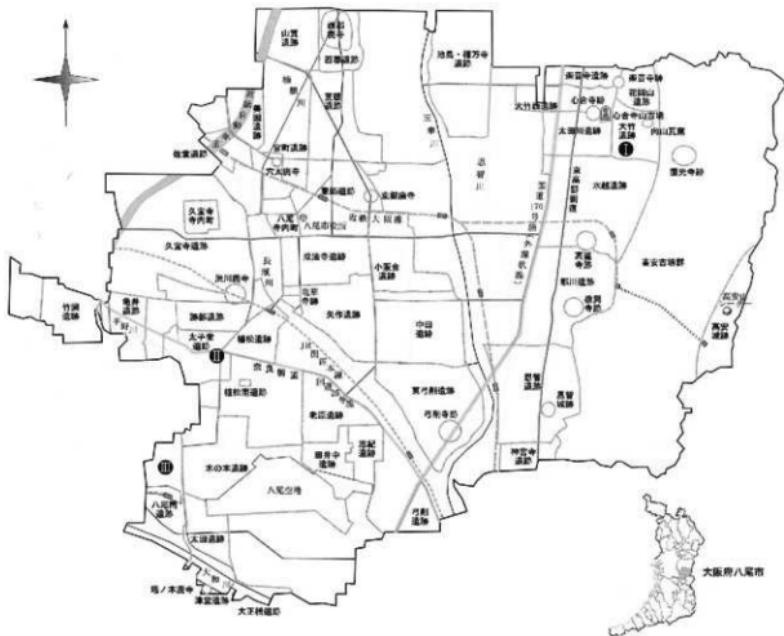
- I 大竹遺跡(第1次調査)
- II 太子堂遺跡(第13次調査)
- III 八尾南遺跡(第31次調査)

2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



I 大竹遺跡(第1次調査)
 II 太子堂遺跡(第13次調査)
 III 八尾南遺跡(第31次調査)



2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成20年度に行いました公共事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

大竹遺跡では当調査研究会としては初めての調査となる第1次調査を実施し、調査地付近の谷地形を確認しました。太子堂遺跡第13次調査は遺構確認調査で、奈良～平安時代頃の遺構を検出しました。八尾南遺跡第31次調査では、西側の調査地と同様に飛鳥時代～近代の生産関連遺構が確認されました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎 健二

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成20年度に実施した、公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成21年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ木村健明、Ⅱ坪田真一、Ⅲ米井友美で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成19年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土地理院第VI系〔日本測地系〕)を示している。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
土師器・瓦器 - 白、須恵器 - 黒
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I 大竹遺跡第1次調査(O T 2008-1)	1
II 太子堂遺跡第13次調査(T S 2008-13)	7
III 八尾南遺跡第31次調査(Y S 2008-31)	17
報告書抄録	

I 大竹遺跡第1次調査(OT2008-1)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市水越六丁目地内で実施した長池改修工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する大竹遺跡第1次調査（OT2008-1）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成20年10月6日～平成20年10月20日（実働8日）にかけて、木村健明を調査担当者として実施した。調査面積は約96m²である。
1. 現地調査においては、梶本潤二・竹田貴子・田島宣子・中野一博・中浜輝志・西出一樹の参加を得た。
1. 内業整理および本書作成にかかる業務は、調査終了後に開始し、平成21年2月に完了した。
1. 本書の執筆は木村が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査の方法と経過.....	2
第3章 調査概要.....	2
1) 基本層序.....	2
2) 検出遺構と出土遺物.....	4
第4章 まとめ.....	4

第1章 はじめに

大竹遺跡は八尾市東部の大竹六～八丁目、水越六・八丁目、神立三・四・六丁目の一部を含む遺跡で、東西約500m、南北約600mの範囲に広がる。

地理的には牛駒山地西麓の扇状地に位置し、北に花岡山遺跡、東に高安古墳群、南に水越遺跡、西に心合寺山古墳・大竹西遺跡・太田川遺跡が接する。また大竹遺跡内にも向山1号墳・2号墳、愛宕塚古墳、双子塚古墳などが存在し、向山古墳の乗る丘陵斜面には平安時代の向山瓦窯跡が存在する。

当遺跡内およびその周辺は、これまで国庫補助事業による確認調査が数件実施されている程度であり、顕著な遺構・遺物は確認されていないため、周辺の状況は不明である。

ただし古墳は調査されているものがあり、中期の心合寺山古墳は史跡整備に伴う調査や周囲の池の改修に伴う調査がなされ、全長160mの古墳の実像が明らかとなっている。また、後期の愛宕塚古墳では、発掘調査がなされ、多数の遺物が出土している。

参考文献

- ・八尾市教育委員会 2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』
- ・八尾市教育委員会 2005『史跡心合寺山古墳整備事業報告書』
- ・八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』



第1図 調査地周辺図

第1表 調査区周辺の調査一覧

番号	調査名	主な成果	文献
1	大竹91-421	GL-0.9mで清状柾橋 遺構の可能性のある層 未確認 遺物なし	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告26 1992 八尾市教育委員会
2	大竹2004-323	セメント層 未確認 遺物なし	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53 2006 八尾市教育委員会
3	大竹2005-356	セメント層 未確認 遺物なし	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57 2008 八尾市教育委員会
4	大竹2006-424	敷地物を確認	『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告57 2008 八尾市教育委員会
5	水越2005-144	河川帯検出	『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告59 2009 八尾市教育委員会
6	OT2008-1	地下水による埋積を確認 遺物なし	本書

第2章 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市水越六丁目に所在する長池の改修工事に伴うものである。調査地の東側には水越総池という溜池が存在している。これらは谷を流れる水を貯留し、灌漑に利用するために下流側に堤防を築き溜池としたもので、現在でも生駒山地西麓に多く見られるものである。

調査は堤防の改修をおこなう池底の南側を対象として実施した。調査範囲の規模は、東西の延長が41.5m、南北幅が2.3mで、面積は約96m²である。

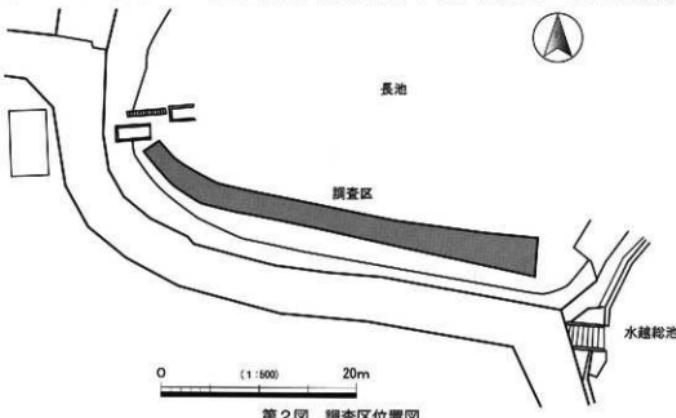
平成20年10月6日から着手し、まず重機によって池底の堆積層（50～90cm）を除去した。その後、それ以下の70cmについて重機及び人力を併用して遺構の有無を確認しながら掘削をおこなった。その結果、遺構は確認できなかった。

工事による掘削はさらに下層（T.P.+29.4m前後）まで及ぶため、その部分に関して掘削に立会い、堆積状況の確認をおこなった。また調査は、3つに区切っておこない、西端→東端→中央の順に実施した。調査前の池底の標高は調査区の西端で31.6m、東端で32.1mを測る。

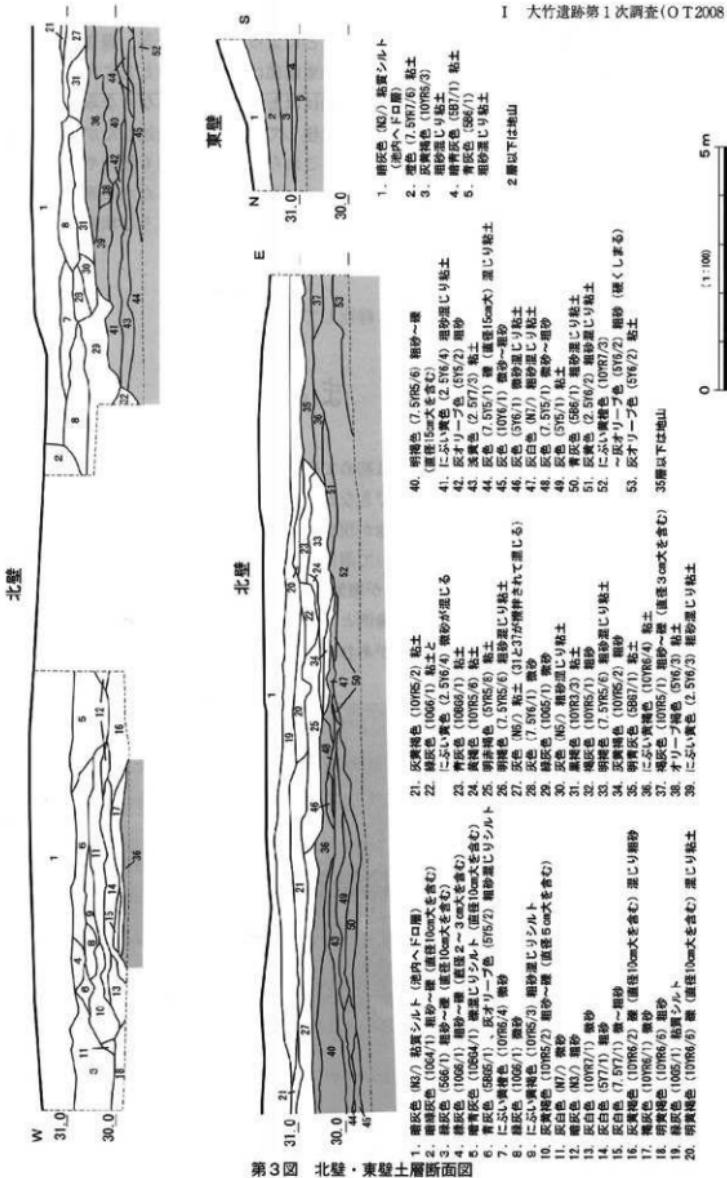
第3章 調査概要

1) 基本層序

調査区の層序は、西端では現地表下90cm、東端では40cmまでは池底に堆積したヘドロや砂の層である。標高の高くなる東側では薄くなる。以下は粗砂層や直径10cm大の礫を含む層が堆積しており、西側では地表下1.9m（T.P.+30.0m前後）、東側では地表下60cm（T.P.+31.0m前後）で地山と考えられる粘土層に到達する。また第3図で東壁として掲載した部分は北壁断面図の東端から1m離れるが、地表下40cmで地山に達し、南側に向かって高くなっていることが確認できる。



第2図 調査区位置図



第3図 北壁・東壁土層断面図

このことは、調査区の南北両側の断面図を比較することによっても確認でき、調査区東側では南側が北側より80cm程地山面が高くなっている。長池の東南部は斜面を堤防として利用していると考えられる。堤防が道路より高くなる西側ではこの差はほとんど認められなくなる。

池の堆積層と地山との間には粗砂や礫を含む層が堆積していることは先述したが、これらの中には溝状に落ち込む箇所を複数確認できる。しかし、これらの切り込み面も粗砂や礫からなる不安定な層であるため、落ち込みは人為的な遺構ではなく、洪水などで生じた水の流れの痕跡と考えられる。痕跡は重複して確認できる箇所もあることから、頻繁にそのような状態が生じていた可能性がある。

2) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、人為的な遺構・遺物ともに確認していない。

第4章　まとめ

今回の調査は大竹遺跡内の当研究会としては初めての本調査であったが、遺構・遺物ともに確認できず、遺跡の様相を明らかにすることはできなかった。

遺構・遺物が確認できなかったのは、調査地が現在も溜池として使用されていることが示すように、本来谷川が流れていた場所に堤防を築いて溜池としている立地上の理由が大きいと思われる。また土壟断面図で確認できるように、洪水が頻繁に起きた不安定な状態であったようである。このような土地条件であるため、生活を営む場所としては利用されてこなかったのであろう。

今後、周辺の水田や住宅地を調査する機会があれば、遺跡の様相が明らかになってくると思われる。



写真1 生駒山地西麓から河内平野を望む



調査前状況（東から）



掘削前状況（西から）



重機掘削状況（東から）



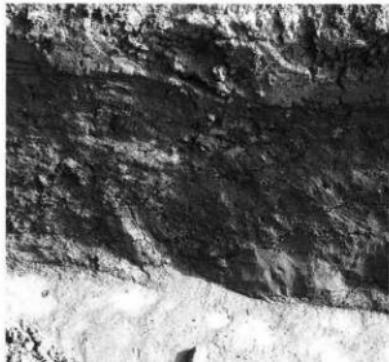
西端完掘状況（西から）



東端完掘状況（東から）



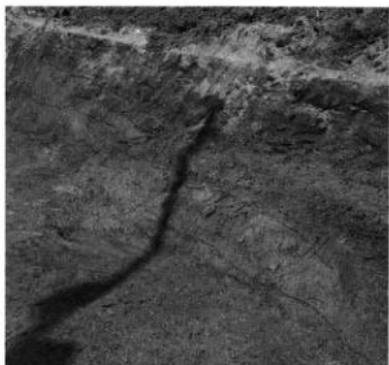
中央部完掘状況（東から）



西端北壁



中央部北壁



東端北壁



中央部南壁



東端南壁



西端下層掘削状況

II 太子堂遺跡第13次調查(T S 2008-13)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南太子堂2丁目地内で実施した新亀井保育所建設に伴う造成工事に伴う太子堂遺跡第13次調査(TS 2008-13)の遺構確認調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成20年12月17日に着手し、平成20年12月19日に終了した(実働3日)。調査面積は36m²である。
1. 現地調査には、伊藤静江・市森千恵子・岩本順子・芝崎和美・田島宣子・永井律子・中浜輝志・西出一樹の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後に着手して平成21年2月27日をもって終了した。
遺物実測－永井
遺構デジタルトレース－坪田
遺物トレース－市森
遺物写真撮影－坪田
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

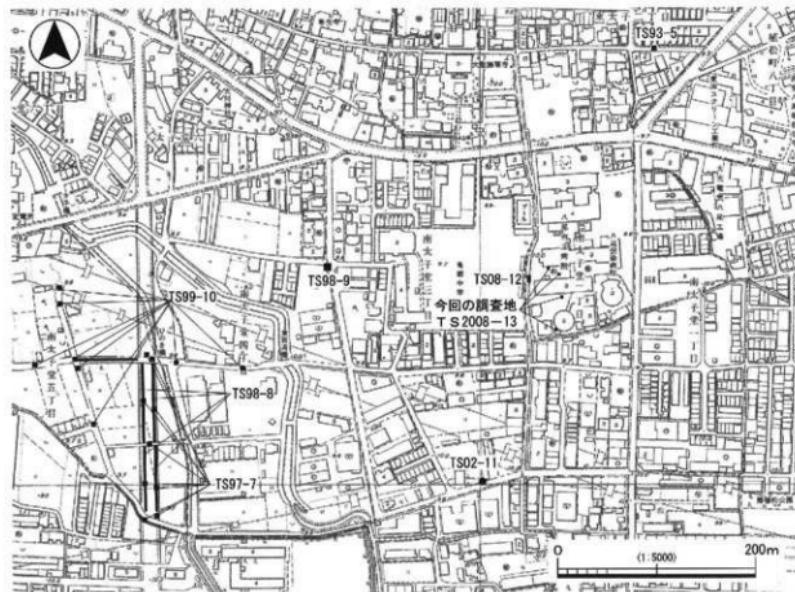
第1章 はじめに.....	7
第2章 調査概要.....	8
1) 調査方法と経過.....	8
2) 調査成果.....	8
第3章 まとめ.....	12

第1章 はじめに

太子堂遺跡は、八尾市の南西部に位置する古墳時代前期～近世の複合遺跡で、地理的には、遺跡内を東から西に横断する旧大和川の主流であった平野川の自然堤防上に立地している。現在の行政区画では太子堂3～5丁目、東太子2丁目、南太子堂1～6丁目がその範囲となっている。当遺跡は、北～西で跡部遺跡、東で植松遺跡に隣接する他、周辺では西に龜井遺跡、東に植松南遺跡、南に木の本遺跡が存在している。

当遺跡は昭和58年3月、八尾市教育委員会が東太子2丁目で実施した試掘調査において、古墳～奈良時代の遺物包含層が確認されたことにより認識された遺跡である。そして同年6～10月に同地点で当調査研究会による第1次調査が行われ、奈良時代の集落構造を中心に、古墳時代中期～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地は遺跡東部の南太子堂2丁目地内に位置する。調査は八尾市立病院跡地南西部で計画された、新龜井保育所建設に伴う造成工事に先立って実施した遺構確認調査である。調査地周辺では西部や南部で公共下水道工事に伴う小規模な発掘調査が行われているのみで、遺跡の実態があまり解明されていない部分といえる。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

調査区は4箇所(北から1～4区)で、各調査区の規模は南北3.0m×東西3.0mである。予定した調査地点が既設建物の基礎部分に当たった場合や、盛土・擾乱が深くまで及んでいた場合は、協議の上、適宜位置を変更して調査を実施した(1・3・4区)。

調査は深さ約3.0mまで機械・人力掘削を併用して実施した。

調査で使用した標高は、調査地西側で実施した公共下水道工事に伴う第12次調査の際設置されていた仮ベンチマーク(T.P.+10.094m)を使用した。

第2節 調査成果

〈1区〉

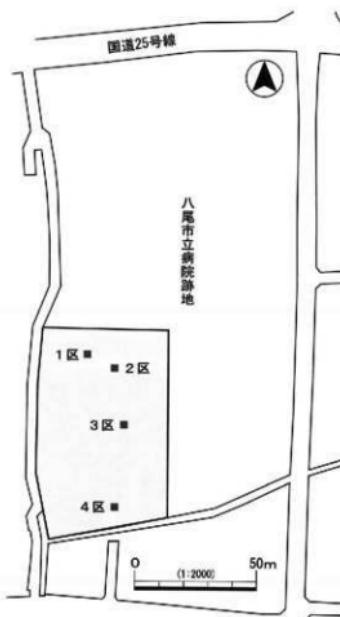
基本層序と検出遺構

0層は盛土・擾乱、1層は旧耕土である(1～3区共通)。2層は近世頃の作土であろう。3層は均質なシルト層で、下位のSD101最終埋土の可能性がある。T.P.+8.6～8.7mの3層上面で近世の溝SD101と東西方向の自然河川NR101を検出した。NR101は南肩を検出したもので、深さ0.7m以上、幅2.5m以上で北に広

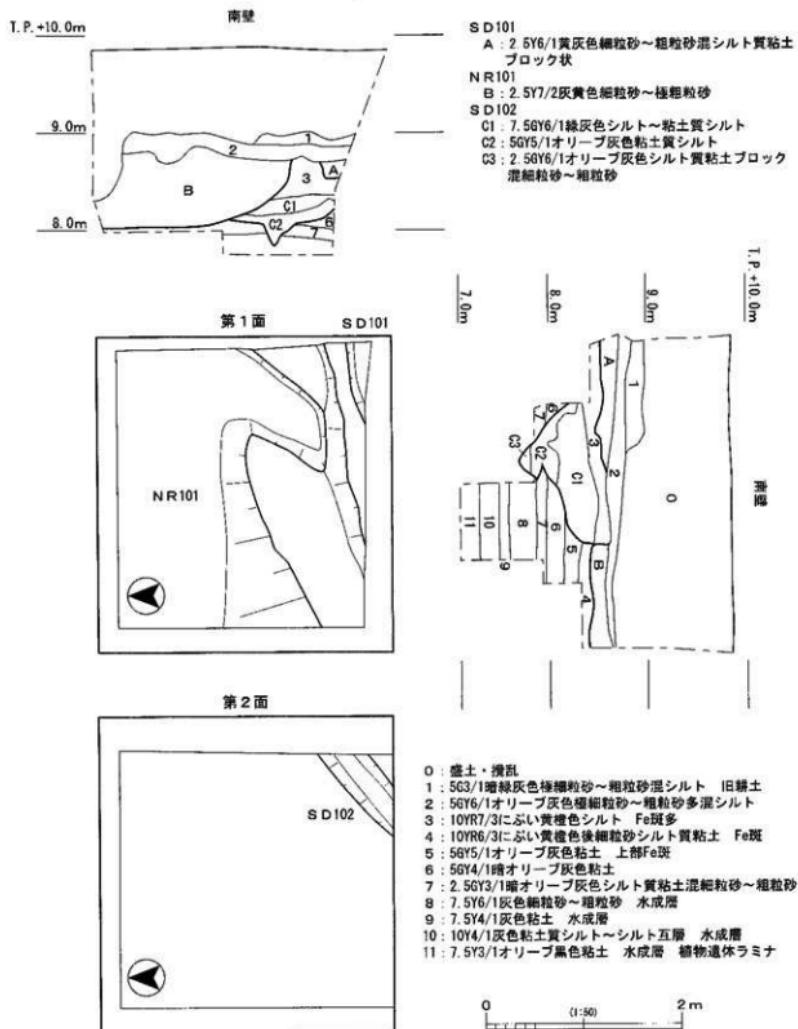
がる。4～6層はシルト質粘土～粘土を基調とする湿地性堆積である。4層上面では北東～南西方向の溝SD102を検出した。上部及び北側はNR101に削平されており、平面的には南壁際で底部付近が遺存するのみである。断面形状はV字に近く、深さ約0.8mを測る。埋土は流水状況を示す3層から成る。遺物は最下層から奈良～平安時代に比定される土師器甌(1)が出土した。T.P.+8.0mの7層は遺物包含層で、破片が集積した状況で土師器甌(2)が出土した。8層以下は粘土～粗粒砂の互層状を成す水成層である。

出土遺物

1は土師器甌の口縁部である。調整はナデで、口径31.0cmを測る。他に内面縦方向のヘラケズリを施し、蒸気孔を有する同一個体と思われる底部付近の破片や体部の破片が、数点まとめて出土しているが固化しえなかった。2は口径13.8cmを測る小形の甌である。調整はハケ調整を多用し、指押さえにより口縁部や体部に凹凸が生じている。時期は明確ではないが、古墳時代後期～飛鳥時代頃と考えられる。



第2図 調査区位置図



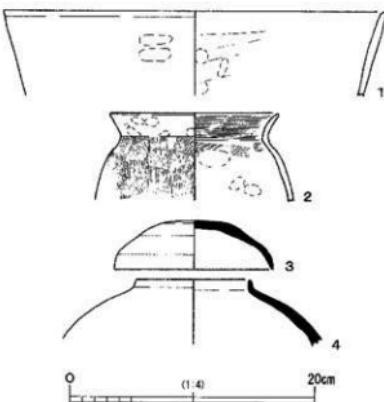
第3図 1区断面図

〈2区〉

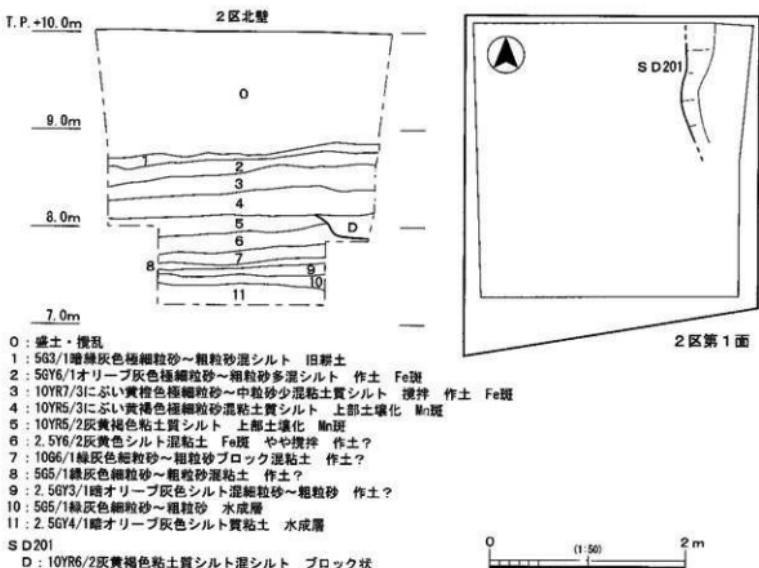
南半部は東西方向の既設管路により擾乱されおり、北半部のみの調査となった。

基本層序と検出遺構

2～4層は中世～近世の作土であろう。3層から中世～近世の須恵器・陶磁器が少量出土している。T.P.+8.1mの5層は古墳時代後期～奈良時代頃の遺物包含層で、土師器・須恵器が出土している。5層上面の東部で南北方向の溝SD201を検出した。規模は幅60cm以上・深さ約30cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は4層から成り、ブロック層を基調とするが一部にラミナが認められる。遺物は奈良時代頃と思われる土師器片が出土したのみである。6～9層はやや搅拌が見られることから作土の可能性があるが詳細は不明である。10層以下は粘土～粗粒



第4図 出土遺物



第5図 2区平断面図

砂の互層状を成す水成層である。

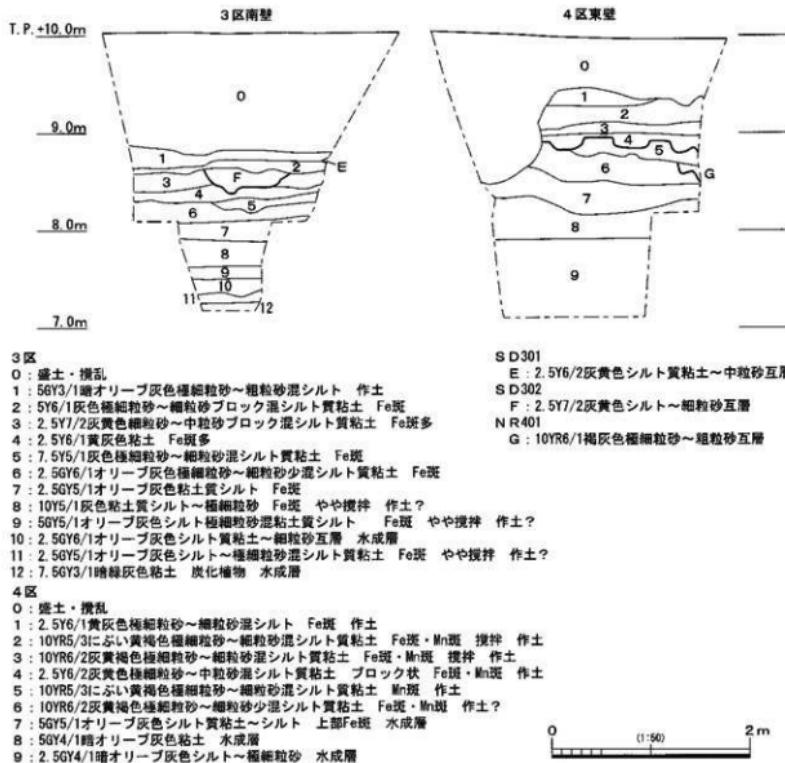
出土遺物

3は5層出土の須恵器杯蓋で、口径13.0cm・器高4.0cmを測る。飛鳥時代前半のT K217型式に比定される。

(3区)

基本層序と構造

2・3層は中世～近世の作土であろう。2層上面で溝S D301、3層上面で溝S D302を断面で確認した。両溝は近世頃の水路と思われ、埋土は流水堆積を示すシルト～砂の互層である。4～7層は粘土～粘土質シルトから成る湿地性堆積である。T.P.+8.1mの7層が奈良時代頃の遺物包



第6図 3・4区平面図

含層である。8・9・11層はやや攪拌が見られることから作土の可能性があるが詳細は不明。10層、12層は水成層である。

出土遺物

7層出土の4は須恵器広口短頸壺である。蓋を被せて焼成しており、肩部に自然釉が掛かる。

（4区）

基本層序と遺構

1～4層は中世～近世の作土であろう。T.P.+8.9mの5層上面では東西方向に平行する耕作溝が見られた。5・6層も作土と考えられ、時期不明の土師器片が少量出土した。T.P.+8.7mの7層以下は粘土～極細粒砂の互層状を成す水成層である。7層上面では調査区南部を北肩として南部に流心を有する東西方向の自然河川N R401を検出した。調査区南側には現在、東西方向の水路が存在するが、この前身の河川とも考えられる。7層からは奈良時代頃の土師器片が出土した。

第3章　まとめ

今回の調査では古墳時代後期～近世の遺構・遺物を検出した。遺構としては北部の1・2区で検出した奈良～平安時代の溝がある。

周辺の調査では、第9次調査で平安時代後期以降に埋没する古平野川が検出されており、その南部の第7・8・10次調査で平安～鎌倉時代の居住域が、また第11次調査で同時期の生産域が確認されている。今回の調査地も古平野川の南に展開する集落域に含まれるものと考えられる。

中世以降は調査地全域が生産域となっているようである。

参考文献

- ・西村公助 2000「V 太子堂遺跡第7次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 2000「VI 太子堂遺跡第8次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2000「X 太子堂遺跡第9次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2001「IX 太子堂遺跡第10次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2005「III 太子堂遺跡第11次調査（TS2002-11）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告85』 財団法人八尾市文化財調査研究会



調査地全景(北から)



1区機械掘削(南東から)



1区第1面(西から)



1区第2面(北から)



1区S D 102遺物出土状況(北から)



1区7層遺物出土状況(東から)



1区南壁



1区東壁



2区機械掘削(西から)



2区作業状況(南西から)



2区北壁



3区実測状況(北西から)



3区西壁



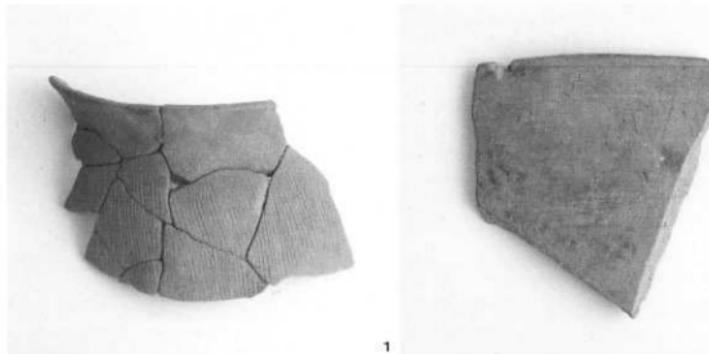
3区南壁



4区近世水田面(東から)



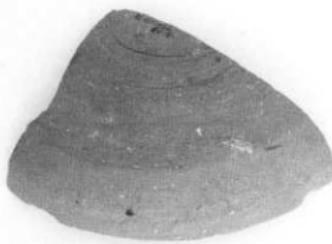
4区東壁



1



2



3



4



III 八尾南遺跡第31次調査（Y S 2008-31）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で実施した、大正住宅建替に伴う文化財発掘業務の報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第31次（Y S 2008-31）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成21年1月26日～平成21年2月6日（実働9日間）にかけて、米井友美を調査担当者として実施した。調査面積は約86m²である。
1. 現地調査にあたった調査補助員は、梶本潤二・田島宣子・吉川一栄である。
1. 内業整理および本書作成にかかる業務は、平成21年2月9日から開始し、平成21年3月9日に完了した。
1. 内業整理および本書作成の作業は、遺物実測－市森千恵子、図面トレース・遺物写真撮影・執筆及び編集－米井が担当した。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	17
第2章 調査の方法と経過.....	18
第3章 調査概要.....	19
1) 基本層序.....	19
2) 検出遺構と出土遺物.....	21
第4章 まとめ.....	24

第1章 はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町一～三丁目、西木の本一～四丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にある。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地、西には上町台地が存在しており、低地から台地への地形変化点にもなっている。この台地付近には多くの遺跡が存在し、当遺跡周辺でも北東に木の本遺跡、南東に太田遺跡、北部から西部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接する。

当遺跡は八尾南駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって発掘調査が行われており、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。今回の調査地は遺跡北部にあたり、近辺では、八尾南遺跡第7・26～28・30次調査で、古墳時代～近代までの水田等の遺構が検出され、平安時代以降には条里制に則って農地が利用され近代に至るまで生産域として利用されていたことが判明している。



第1図 調査地周辺図

第1表 調査地一覧表(第1図に対応)

番号	遺跡名(略称)	調査期間	面積(㎡)	種別	主な時代	文献
1	八尾南第3次 (YSS8-03)	八文研	900	生産域・居住域 生産域	古墳時代 平安時代	原昌雄他 1985 「II. 八尾南遺跡(第3次調査)」『(財)八尾古文化財調査研究会報告6』
2	八尾南第6次 (YSS8-06)	八文研	120	生産域?	古墳時代～平安時代	西村公勤 1987 「IV. 八尾南遺跡(第6次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
3	八尾南第10次 (YSS8-10)	八文研	3013	生産域	古墳時代 平安時代～鎌倉時代	西村公勤 1988 「III. 八尾南遺跡(第10次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告16』
4	八尾南第10次 (YSS8-10)	八文研	695	生産域・居住域 生産域	古墳時代 平安時代	西村公勤 1993 「III. 八尾南遺跡(第10次調査)」『平成4年度八尾市文化財調査研究会報告16』
5	八尾南第18次 (YSS9-19)	八文研	352	居城	古墳時代	西村公勤 1993 「III. 八尾南遺跡(第18次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告19』
6	八尾南第19次 (YSS9-19)	八文研	700	?	弥生時代	西村公勤 1994 「III. 八尾南遺跡(第19次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告20』
7	八尾南第26次 (YSS2004-26)	八文研	50	生産域	古墳時代 平安時代	高木千秋 2004 「III. 八尾南遺跡(Y2004-26)の調査」『八尾市立埋蔵文化財調査セミナー報告6』
8	八尾南第27次 (YSS2005-27)	八文研	1419	?	古墳時代	島田裕弘 2007 「八尾南遺跡(第27次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告7』
9	八尾南第28次 (YSS2005-28)	八文研	723	生産域	平安時代～近世	糸谷真代子 2007 「八尾南遺跡(第28次調査)」『八尾市文化財調査研究会報告8』
10	八尾南第30次 (YSS2008-30)	八文研	101	生産域	古墳時代 平安時代～近世	糸谷真代子 2008 「八尾南遺跡第30次調査」『八尾市文化財調査研究会報告12』
11	長原遺跡 (N82-26)	大文協	-	河岸	織文時代	1982 「近畿財務局公務官宿舎に伴う長原遺跡発掘調査(N82-26)報告」
12	八尾南遺跡	市教委	190	生産域	古墳時代	末山敬重 1981 「八尾南遺跡絶滅跡確認調査」『八尾市遺跡・古跡発掘発見報告6』
13	八尾南遺跡	市教委	-	-	平安時代	末山敬重 1983 「八尾市埋蔵文化財発掘調査1980-1981年度」『(財)八尾市文化財調査研究会報告2』

※調査機関 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

市教委：八尾市教育委員会

大文協：(財)大阪市文化財協会

第2章 調査の方法と経過

今回の調査は大正住宅建替に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第31次調査である。

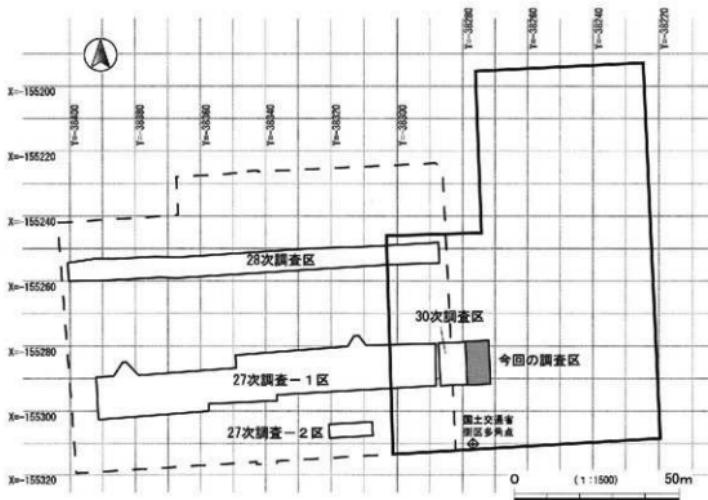
調査対象範囲は建物本体の基礎工事により遺跡が破壊される範囲で、調査面積は約86m²である。当初、調査する深さは地表下1.5m前後までを予定していたが、下層部で遺構・遺物の存在が見込まれたため地表下約1.8m前後まで調査を行った。また、調査区北西部で河川と思われる遺構を検出したため東壁北端部に長さ約3.5m、幅約0.5m、深さ約0.3mのトレンチを設定し、下層確認による断面調査を行った。

掘削は重機による機械掘削と人力掘削を併用して行った。現地表下約0.7mまでと現地表下約1.1~1.4m、現地表下1.5~1.7mの間を機械掘削し、現地表下約0.7~1.1m、現地表下約1.4~1.5m、現地表下約1.7~2.1mの間を人力による掘削を行った。

地区割については調査地西側で当研究会が行った八尾南遺跡第27次調査で使用した地区割を東部に延長する方法を取った。座標は国土座標第VI系(新座標:世界測地系)を使用し、標高はT.P.値を使用した。

調査面は機械掘削が終了し、人力による調査で検出された面を「第1面」と呼称し、以下、上から順に調査面番号を付す。

遺構名は、遺構略+3桁数字で表し、数字の第一桁を面、後の二桁を遺構番号とした。



第2図 調査区位置図

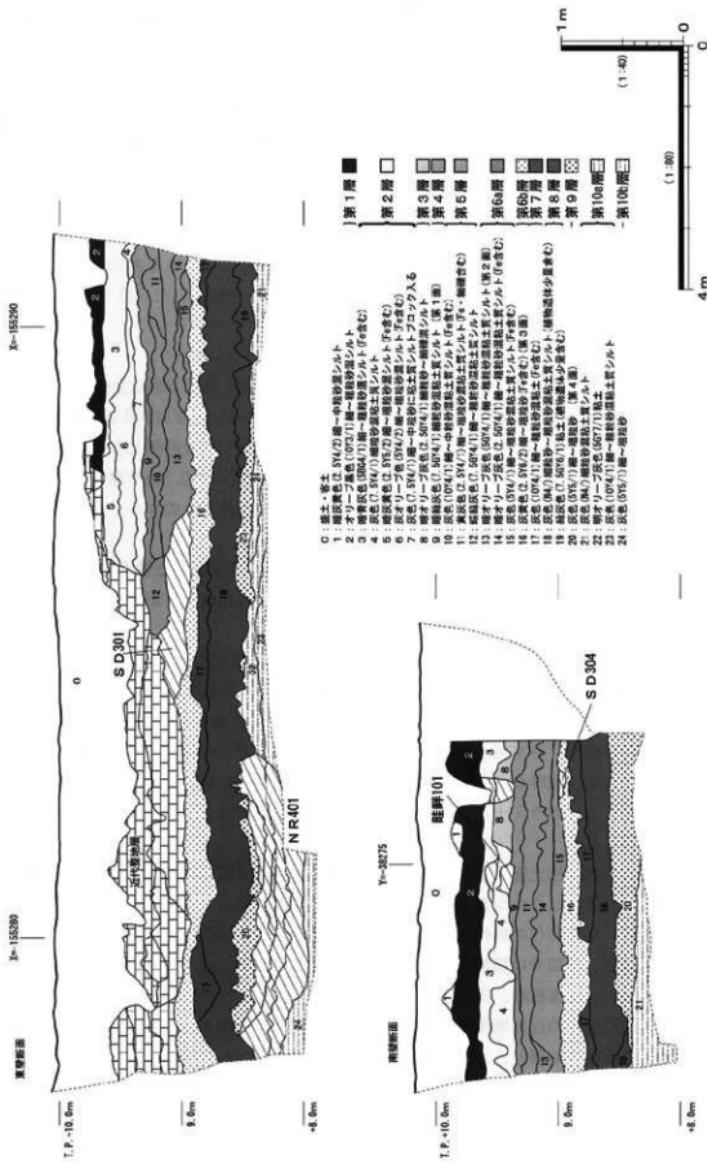
第3章 調査概要

1) 基本層序

現地表下0.7~1.8m前後まで平面的に調査を行い、下層確認による断面調査を現地表下2.1m前後まで行なった。調査区北半で近代以降の整地を受け、西壁付近でも水道管・ガス管などが設置されていたため大きく搅乱を受けていたことから、主に南壁・東壁を参考に断面観察を行った。基本の層位として10層を確認し、今回の調査地の西側で行われた第30次調査と同様の結果が得られた。基本層名は、同じ層の中で搅拌・土壤化層と自然堆積層に分けられる場合、番号の後ろに搅拌・土壤化層は「a」、自然堆積層は「b」のアルファベットを付加した。以下、調査区における層位と、調査で確認できた遺構面の関係について記す。

- 第0層** 八尾空港及び旧市営住宅建設・解体に伴う盛土と搅乱層。層厚は約0.2~0.6mを測る。
- 第1層** 旧耕土層。オリーブ黒色の細粒砂～粗粒砂混じりのシルト。層厚は約0.2~0.3mを測る。
- 第2層** 近世以降の耕作土層。暗青灰～灰色と暗灰黄色の細粒砂～粗粒砂混じりのシルトで、一部で3層に細分でき、下層は粘質が強くなる。層厚は約0.1~0.3mを測る。
- 第3層** 中世～近世の耕作土層。暗オリーブ灰色の細粒砂～細礫混じりのシルトで、細礫を多く含む。当該層までを重機で掘削した。
- 第4層** 中世の水田作土層。灰～暗オリーブ灰色の細粒砂～粗粒砂が混じる粘土質シルトの層で、層厚は約0.1~0.2mを測る。下面で踏み込みが認められ足跡などが検出された。当層上面で第1面を検出した。
- 第5層** 中世の水田作土層。暗オリーブ灰～黄灰色の細粒砂～粗粒砂混じりの粘土質シルトで、淘汰の悪い搅拌層で、下面では踏み込みが認められる。層厚約0.1~0.3mを測る。
- 第6層** 平安時代～中世の水田作土層である第6a層と自然堆積層である第6b層に分かれる。
第6a層は暗オリーブ灰～灰色の細粒砂混じりの粘土で、一部で3層に細分できる。上面で溝、土坑、畦畔などの遺構を検出した。第6b層は灰黄色の細粒砂～粗粒砂で、一部では水平方向のラミナが認められる。第6a層上面で第2面を、第6b層上面で第3面を検出した。
- 第7層** 平安時代の水田作土層。上面は層の淘汰が悪く、第6b層の灰黄色の砂が混じる灰色の粘性が強い砂混じりのシルトで、Fe斑が顕著にみられた。
- 第8層** 飛鳥時代～平安時代の耕作土層。灰～緑灰色の細粒砂～粗粒砂混じりのシルトで、均質な搅拌層で、一部では植物遺体が含まれる。
- 第9層** 古墳時代の自然堆積層。灰色の細粒砂～粗粒砂で、層厚約0.1~0.2mを測る。洪水などによる氾濫起源の自然堆積層と考えられる。当層上面で第4面を検出した。
- 第10層** 土壤化層の第10a層と、自然堆積層の第10b層に分かれる。遺物を含まないため時期は不明である。第10a層は3層に細分でき、明オリーブ灰～灰色の微粒砂～細粒砂混じりの粘土質シルト～粘土で、粘性が強い。第10b層は灰色の細粒砂～粗粒砂で、ラミナは認められないが、洪水などによる氾濫起源の自然堆積と考えられる。

第3図 調査区断面図



2) 検出構造と出土遺物

〈第1面〉(近世～近代)

第1面は、機械掘削終了後、第3層を除去し検出した面で、検出高は約T.P.+9.3mである。調査地中央より北側は、約T.P.+9.0m付近まで大きく擾乱を受けており、近代以降に建物が建てられたか、整地されたと考えられる。

近代の構造

調査区北東で木組を検出した。調査区外へ広がるため全形は不明である。長さ2.0m以上、幅1.5m、深さ0.6mの方形の土坑内に、長さ約1.3m以上、幅約0.15mの板で方形の枠が組まれ、枠内で幅約0.1m、長さ約1.0mの板と、直径約0.1m、長さ1.95m以上の丸太でつくられたスノコを検出した。埋土は上から暗緑灰色の砂混じりの粘土質シルト、こぶし大の礫、緑灰色の粘土質シルト、灰色の砂の4層を確認した。遺物は陶器片、木製品、鉄釘、銅製品などが少量出土している。丸太とスノコの板の連結に丸釘が用いられていることから、近代以降のものと考えられる。

調査区中央の東西にのびる近代以降に構築された排水溝状の構造を検出した。第30次調査でも同様の構造を検出し、その延長と考えられるが、上層は大きく擾乱を受けており、掲示等は確認できなかった。

畦畔101

幅約0.3～0.6m、高さ0.1m、長さ約5m以上を測る。南北方向に伸びており、第4層を盛り上げて造成されている。

S D101・102

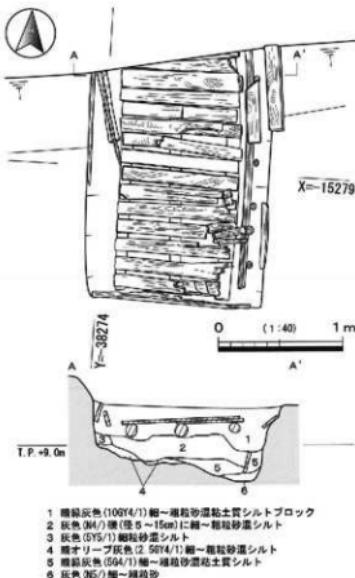
幅約0.3～0.5m、長さ約1.5～4.6m以上、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は暗青灰色の砂混じりのシルトで遺物は含まれなかった。2条とも南北方向に伸びる溝で、耕作関連の溝と考えられる。

S P101

調査区南側で検出した。調査区外へ広がるため全形は不明であるが、径0.5m以上、深さ0.2mを測る。埋土はオリーブ灰色の砂混じりの粘土質シルトで、遺物は含まれなかった。

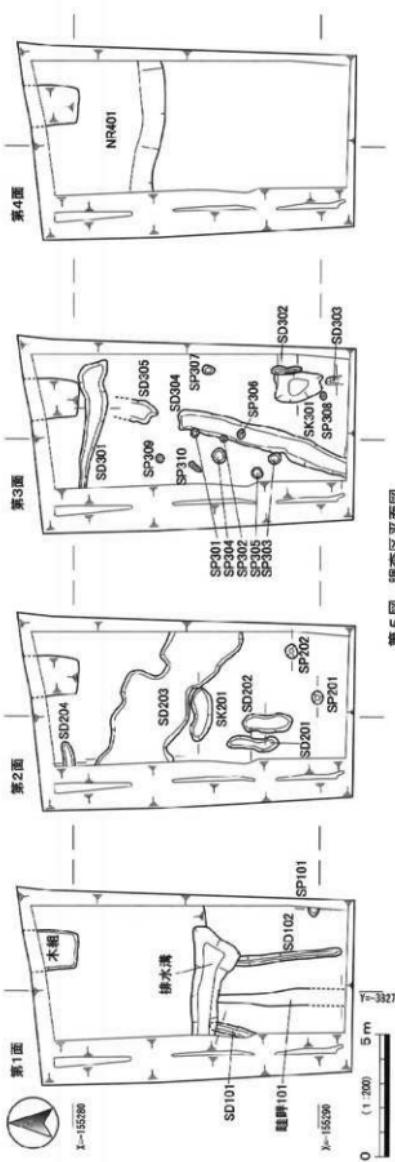
〈第2面〉(平安時代～中世)

第2面は、第5層を除去して検出した面で、検出高は約T.P.+9.1～9.2mである。土坑、溝、ピットなどを検出し、調査区南半の一部で足跡が認められた。また、調査区北端がやや高くなってしまっており、東西方向の畦の可能性がある。

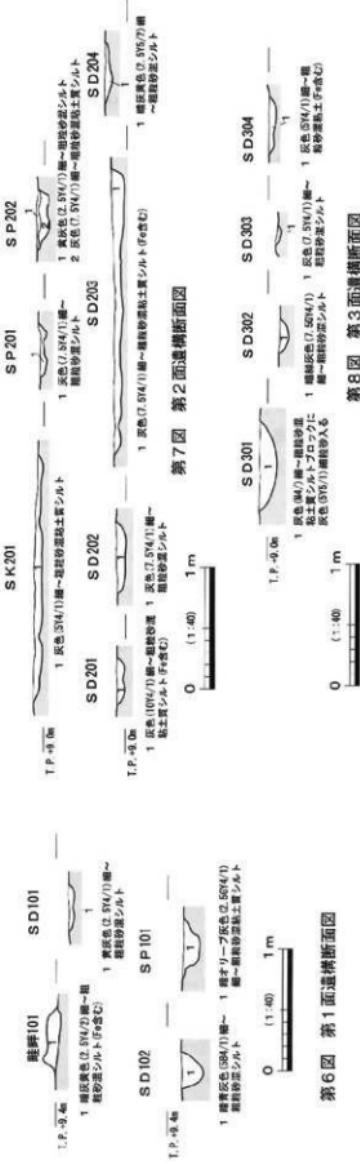


第4図 木組平・断面図

- 1 暗緑灰色(1064/1)細～粗粒砂混粘土質シルトブロック
- 2 灰色(4M/1)細～粗粒砂混シルト
- 3 灰色(GY5/1)細粒砂混シルト
- 4 ホオリーブ灰色(2.5874/1)細～粗粒砂混シルト
- 5 混凝灰岩(594/1)細～粗粒砂混粘土質シルト
- 6 灰色(9G/1)細～粗粒シルト



第5図 調査区平面図



卷之三

第8圖 第3面譜横断面図

S K201

長径約2.1m、短径約0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色の砂が多く混じる粘土質シルトで遺物は含まれなかった。第5層が攪拌されて落ち込んでいる可能性もある。

S D201・202

2条とも南北方向に伸びる溝で、幅約0.5~0.7m、長さ約2.0~2.1mを測る。埋土は灰色の砂混じりのシルト~粘土で、遺物は土師器の細片が少量出土した。耕作関連の溝と考えられる。

S D203

調査区中央の北西から南東へ伸びる溝で、幅約1.5~2.4m、長さ6m以上、深さ0.2mを測る。埋土は灰色の砂混じりの粘土質シルトで遺物は土師器の細片が少量出土した。

S P201・202

2基とも調査区南側で検出した。径約0.4~0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は灰~黄灰色の砂混じりのシルト~粘土で、S P202から土師器皿(1)が出土した。1は小型の土師器皿で、内・外面ともヨコナデとナデが施される。12~13世紀に比定される。



第9図 S P202出土遺物実測図

<第3面> (飛鳥~平安時代)

第3面は、第6a層を除去して検出した面で、検出高は約T.P.+8.9~9.0mである。

S K301

長さ1.9m、幅1.3m、深さ約0.2mを測る方形に近い形状を呈する。埋土は黄灰色の砂混じりの粘土質シルトで遺物は含まれなかった。

S D301

調査区北側で検出した東西方向に伸びる溝で、幅約0.3~1.1m、長さ5m以上、深さ0.2mを測る。埋土は灰色の粘土質シルトブロックに細粒砂が入る。遺物は土師器の細片が少量出土した。

S D302・303

調査区南側で検出した南北方向に伸びる溝で、幅約0.1~0.3m、長さ0.5~1.2m以上、深さ0.1mを測る。埋土は灰~暗緑灰色の砂が多く混じるシルトで、遺物は含まれなかった。

S D304・305

南北方向に伸びる溝で、調査区北側で途切れているが、一連の溝と考えられる。埋土は、暗オリーブ色の粘土質シルトのブロックに第6b層の灰黄色の砂が多く混じるもので、第6a層の下面で攪拌されて溝状に落ち込んでいる可能性もある。

S P301~310

調査区中央~南側で検出した。各小穴の法景等は第2表に示した。いずれも埋土は黄灰色の砂混じりのシルトで、遺物は含まれなかった。

第2表 第3面小穴(S P)法量表

(単位:m)

遺構名	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物	遺構名	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP301	円形	0.40	0.34	0.06	黄灰色土~細粒砂混シルト	なし	SP306	円形	0.45	0.32	0.06	黄灰色土~細粒砂混シルト	なし
SP302	円形	0.35	0.32	0.06	+	+	SP307	円形	0.47	0.44	0.06	+	+
SP303	円形	0.51	0.49	0.05	+	+	SP308	円形	0.39	0.30	0.05	+	+
SP304	円形	0.70	0.65	0.11	+	+	SP309	円形	0.35	0.35	0.07	+	+
SP305	円形	0.45	0.40	0.05	+	+	SP310	椭円	0.67	0.31	0.05	+	+

〈第4面〉(古墳時代)

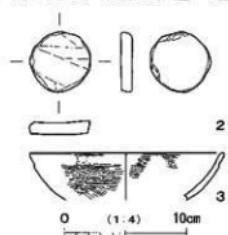
第4面は第8層を除去して検出した面で、検出高はT.P.+8.5~8.6mである。第30次調査では、第9層上面において多数の遺構を検出したため、今回の調査でも同様の遺構の存在が想定されたが、第9層の堆積が薄くなっているため、遺構は検出されなかった。第10層が北側に向かって高くなっていることが確認できた。

N R401

調査区北側で検出された。規模や全形は調査区外へ広がるため不明である。埋土は灰色~暗緑灰色の粘土・シルト層が互層状に堆積していた。第30次調査で検出された河川(N R501)の延長と考えられる。

〈遺構に伴わない遺物〉

第3層から2、第6b層から3が出土している。2は土器を利用した転用円板である。径約4.7cm、厚さ約0.9cmを測り、円形を呈する。近世に比定できる。3は和泉型瓦器輪で、口縁部から体部まで残存する。調整は口縁部はナデ、体部は内・外面に密なヘラミガキが施される。12世紀初めに比定できる。



第10図 第3・6層出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回の調査では、古墳時代から近代に至るまでの4面の遺構面を検出し、遺物はコンテナ1箱分が出土した。第1~3面は、飛鳥時代~近代の耕作面で、近代の遺構と畦畔や溝など耕作関連の遺構のほか、ピットを数基検出した。近代のものでは、排水溝と木枠とスノコが設置された土坑を検出した。土坑についてはやや規模が大きいことから、八尾空港(旧大正飛行場・阪神飛行場)に関連した遺構である可能性が高い。調査地周辺は古代から近代に至るまで生産域として利用され、条里制が残っていたことが既往の調査から判明しているが、今回の調査でも、度々洪水災害による耕作面の廃絶とその後耕作面の復旧を繰り返し利用され、第1面では条里制に則った遺構と考えられる南北方向にのびる畦(畦畔101)を検出した。第4面は、第30次調査で古墳時代の遺構が多数検出されていた面であったが、今回の調査では同時期の遺構が検出されず、下層の土壤化層及び水成堆積層が高くなっていることが確認できた。このほか、遺物が出土しなかったため明確な時期は不明であるが、古墳時代以前の河川と考えられる遺構(N R401)を検出した。第27次調査で行われた下層確認の際に検出された落ち込み(128落ち込み)及び、第30次調査で検出された河川(N R501)に続く可能性がある。

参考文献

- ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・島田裕弘 2007『八尾南遺跡(第27次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告102 八尾市文化財調査研究会
- ・米井友美 2008『八尾南遺跡第30次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告121 八尾市文化財調査研究会



第1面全景(北から)



第2面全景(北から)



第3面全景(北から)



第4面全景(北から)



南壁断面



東壁断面



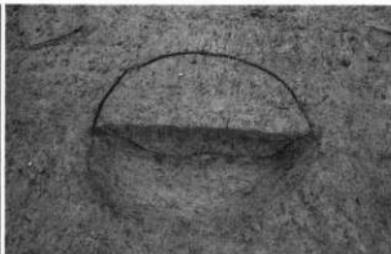
木組(北から)



木組下層断面



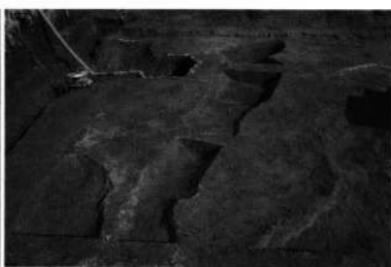
S D203(東から)



S P202(南から)



S K301(南から)



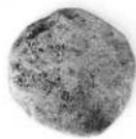
S D301(西から)



N R401断面(西から)



1



—



2

第3層出土遺物



3

第6層出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	おおたけいせき たいしどういせき やおみなみいせき 大竹遺跡 太子堂遺跡 八尾南遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	128
編著者名	I木村健明、II坪田真一、III米井友美
収集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0621 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2009年3月31日

所取遺跡名	所取在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大竹遺跡 (第1次調査)	大阪府八尾市水越六丁目	27212	56	37度38分07秒	135度38分36秒	20081006～20081020	96	長池改修工事
太子堂遺跡 (第13次調査)	大阪府八尾市南太子堂二丁目地内	27212	62	34度36分40秒	135度35分21秒	20081217～20081219	36	新龟井保育所建設に伴う造成工事
八尾南遺跡 (第31次調査)	大阪府八尾市西本の本四丁目地内	27212	67	34度35分58秒	135度34分58秒	20090126～20090206	86	大正住宅建替

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大竹遺跡 (第1次調査)	集落	-	-	-	調査区は谷部に位置していたと思われ、遺構・遺物は確認できなかった。
太子堂遺跡 (第13次調査)	集落	古墳時代後期～飛鳥時代 奈良～平安時代 近世	遺物包含層 溝 水田・溝・自然河川	土師器・須恵器 土師器	
八尾南遺跡 (第31次調査)	集落	古墳時代以前 飛鳥～平安時代 平安時代～中世 近世～近代	自然河川 上坑・溝・ピット 土坑・溝・ピット 畦畔・溝・ピット・木根	土師器 土師器・瓦器	

要約	大竹遺跡では調査区が谷部に位置していたと思われ、遺構・遺物は確認できなかった。太子堂遺跡では奈良～平安時代の溝を検出した。八尾南遺跡は飛鳥時代～近代の3面の耕作面を確認した。
----	---

(財)八尾市文化財調査研究会報告128

I 大竹遺跡(第1次調査)

II 太子堂遺跡(第13次調査)

III 八尾南遺跡(第31次調査)

発行 平成21年3月
編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市空町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 ㈱近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

大竹遺跡 太子堂遺跡 八尾南遺跡

二〇〇九年

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告書